



# 学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和4年 4月 28日 5月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

## ～ 隣国の教育事情から見えるもの ～

校長 黒木 健

初夏を感じさせる気候が続いておりますが、本校保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。さて、今月の学校だよりですが、隣国中国における小学校の教科書から、その指導事項を概観しつつ、日本のそれとも比較しながら、その一部をご紹介しますと思います。

小学校では一昨年4月から、中学校では昨年4月から、文部科学省が定める新しい「学習指導要領」が導入実施されました。その中で小学校における大きな変革の一つに、5・6年生における「外国語活動」の「外国語」への格上げ（教科化）が挙げられます。これまで「話すこと」、「聞くこと」の二技能であったものに、新たに「読むこと」、「書くこと」の指導事項と、さらに評価も加わることとなりました。ただ、「読む」、「書く」と言っても、あくまでもアルファベットの「読み方が分かり」、且つその文字（大文字と小文字）を「正確に書くことができる」ことや、「音声で十分に慣れ親しんだ表現を書き写すことができる」といった限定された範囲内に止まるものであって、読解や英作文的なレベルまでは、求めないことになっています。

新型コロナウイルス発生前の話ですが、中国北京の書店で偶然手に取った小学校の教科書（5年生・英語）を見て、大きな衝撃を受けました。そこには5年生であるのに、まとまった長文の英文を読ませ、そこから読解した内容を、用意された一覧表に穴埋めをさせる学習や、英文の選択肢から、その本文の内容に合致するか否かを考えさせるといったものまで盛り込まれていて、日本では、中学校2年生の後半以降ぐらいで指導するようなレベルのものが多数含まれていました。また文法についても、それを解説する記述が、教科書上に一切見当たらないにもかかわらず、主語＋動詞の後に節が続いたり、また動詞を並列させることで、長い英文を示してみたり、さらに、比較級や最上級といった比較表現まで登場したりするのは、とても驚かされました。これを5年生の児童にいきなり読解させるのかと思うと、その指導方法も気になるころではあります。日本における初等・中等教育は、どちらかと言うと、既習事項を着実に積み上げさせながら、続く単元や次の学年への緩やかで確かな接続を目指すことに力点を置いたものが多いと個人的には捉えています。中国では少なくとも英語に関しては、理解できるかどうかは置いておいて、それぞれの学年にとって、かなり負担感のある複雑な英文を取って大量に読ませることから、一歩先の学習への接続をやや強引に促そうと考えているとも言えそうです。会社員であった北京駐在時、私は流暢に外国語を操る多くの中国人と接してきましたが、今思い返してみると、その方々の全てが、大学などで専門にその外国語を学んできた訳ではなかったということに、改めて気が付かされました。もしかすると、上述したような背景が学校の日常風景としてベースにあったからではなかったかと、部分的にはありますが合点がいった次第です。

もう一つ、この国の世相を象徴しているものとして、「道徳」の教科書の内容が特徴的でしたので、その一部もご紹介させていただきます。「道徳」は、中国では「道徳と法治」という教科名になっていて、文字通り、世の中の決まりを教えることに主眼が置かれているようです。日本における「道徳」の授業というと、学年の発達段階に応じて、一定のまとまった文章を読むことを通して、その中から感じられたことなどを発言し合いながら、自分の日常生活や生き方を振り返ったり目標をもったりするという形式が多いと言えます。しかし、この「道徳と法治（3年生）」では、例えば、長期休暇や週末は計画的に過ごすこと、日直としての仕事や教室内の清掃や整理整頓は確実にを行うこと、学級でのルールは、これをしっかりと守ること、列にはきちんと並ぶこと、必要に応じて譲り合うこと、公共の場では大声を出さないことなどなど、各校で定めている「スタンダード」に近いものが、そのまま教科書に書かれているところに、日本との大きな違いを感じました。もちろん単純比較はできませんが、こうした諸外国の学校での指導事項の相違点などから、私たちの立ち位置を改めて問い直してみること、時には意味のあることなのかもしれません。